

吉祥の花果

めでたいきざしを示す吉祥の花や果実は、牡丹と蓮花、桃と柘榴ざくろに代表される。牡丹は唐代から園芸花として楽しまれたが、その花の容姿が豪華であるため「富貴花・百花の王」といわれ、絶世の美女にたとえられて、豊満や富裕の象徴となった。蓮の花は花と実をともにつけて繁茂することから豊穰の象徴とされ、また蓮の発音が「隣」や「恋」に通じ、別名の荷花の発音が「和合」に通じることから、良縁や夫婦和合、子孫繁栄の寓意とされた。また、蓮は泥中から出て清浄な花を咲かせることから、その清逸さをたたえて君子の花とされ、加えて仏教では「解脱げだつ」を意味した。一方、桃の実は、西王母の住まいする瑤池ようちの果樹園になる蟠桃ばんとうを連想することから、「長寿・長生」の象徴とされた。柘榴は前漢代以前には西アジアから中国に伝播したが、その実は種が多いことから「多子・子孫繁栄」の象徴とされた。